

## 第 66 回 近 畿 地 区 卒 業 設 計 コ ン ク ー ル 応 募 作 品 一 覧

平成 2 4 年 4 月 1 1 日

日本建築学会近畿支部

### 《 短 大 ・ 高 専 ・ 専 修 学 校 の 部 》

No.	作 品 名	学 生 氏 名	所 属	図 面 枚 数
①	<a href="#">住み継ぐ</a>	能勢 知理	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	29
2	それぞれの住まい	石垣 広大	中央工学校 OSAKA 建築学科	14
③	<a href="#">「続・丹下建築」</a>	阿部 亮介	京都建築大学校 建築科	6
4	Liberation	岡崎 哲也	大阪建設専門学校 建築学科	5
5	居場所を残す	森田 和也	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	12
⑥	<a href="#">デ木ボ木 一六甲山の地場産材を利用した</a>	安福 和弘	明石工業高等専門学校 建築学科	6
7	開かれたかたち	谷口 弘一	大阪工業技術専門学校 建築学科Ⅱ部	9
8	「流れを繋ぐ」	藤田 彩香	京都建築大学校 建築科	2
9	独りぼっちからの脱出	大前 小百合	中央工学校 OSAKA 空間 CG デザイン科	6
10	鴨川の畔に建つ	松澤 文香	京都建築専門学校 建築科二部	9
11	京橋ワンダーグラウンド	小川 知世	大阪工業技術専門学校 建築学科二部	5

(受付順) 以上 1 1 点 < N o . 欄 に ○ 印 の も の は 入 選 作 品 >

### 《 工 業 高 校 建 築 科 の 部 》

No.	作 品 名	学 生 氏 名	所 属	図 面 枚 数
1	「古民家風喫茶店 茶風」	西村 洋貴	兵庫県立豊岡総合高等学校 環境建設工学科	1
2	新瑞光中学校設計図書	南野 騰志	大阪市立都島工業高等学校 建築科	7
3	「京都市北図書館改修案」	池田 沙恵子	京都市立伏見工業高等学校 システム工学科 住環境システムコース	5
④	<a href="#">connection</a>	山本 沙也加	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	7
5	Forest Museum	岩谷 知晃	神戸市立科学技術高等学校 都市工学科	6
6	神戸市立神若通図書館	積 栄一	大阪市立都島工業高等学校 建築科	6
⑦	<a href="#">PAPPA-RAPPA～一等地のアジュール～</a>	岡田 真弥	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	6
8	「森閑」	井垣 義稀	兵庫県立豊岡総合高等学校 環境建設工学科	1
⑨	<a href="#">「Ring Kindergarten」</a>	上田 恭平	神戸市立科学技術高等学校 都市工学科	5

(受付順) 以上 9 点 < N o . 欄 に ○ 印 の も の は 入 選 作 品 >

日本建築学会近畿支部  
平成23年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校  
卒業設計コンクール（第66回）審査報告

審査員長 飯田 匡

平成24年4月11日（水） 審査会場・大阪科学技術センター（4階403号室）

審査員長（互選）	飯田 匡	
審査員	角田 暁治・朽木 順綱・小池志保子・佐野こずえ・ 槻橋 修・西濱 浩次	（50音順）
応募作品	短大・高専・専修学校の部11点、 工業高校の部9点	（別紙参照）

#### 審査経過と審査講評

はじめに本コンクールの主旨と審査に関する内規、及び昨年度の実績と本年度の応募状況を確認し、審査会に出席した6名の委員の互選により審査委員長を決定した。審査員7名のうち1名は当日欠席であったが、事前に審査を行っており、その結果を審査会の記名投票の集計に加えるかたちで参加した。

審査は、まず各審査員が全応募作品を入念にチェックし、優れていると思われる作品を「短大・高専・専修学校の部」では、応募11作品の中から3作品、「工業高校の部」では、9作品の中から3作品を選び、投票を行った。

「短大・高専・専修学校の部」では、No.6が満票の7票を得た。コンセプト、図面表現、環境への配慮等、高いレベルで調和しており、入選に相応しい作品との合意を得た。次いで票が多かったのが、5票のNo.1、4票のNo.3であった。その他、2票が2作品、1票が1作品であった。これら5点を入選作品候補として議論を重ね、結果No.1とNo.3を入選とした。No.1は、一軒の木造住宅が住み継がれていくプロセスを丁寧に追った、真面目な提案が好感を持てる作品であった。No.3は、丹下謙三による今治市役所を学生らしく大胆に再生する計画で、その力強さが評価された。2票、1票を得た3作品については、それぞれ注目に値する点はあるものの、総合的には上位作品にはおよばないものと判断された。以上、結果的には得票数上位の3作品が入選となった。

「工業高校の部」では、No.7とNo.9がそれぞれ満票の7票を集めた。ともに入選とするに相応しい作品であることを全員で確認した。その他は、No.4が4票、No.5が3票を集めた。この2作品で審査員の評価が分かれたため、それぞれの作品を前に時間をかけて議論を行った。No.4については図面の完成度や学生らしい提案が評価されたが、一方で形態に関する説明が不十分との指摘があった。No.5については、シンプルな形態の中に機能をうまくまとめているが、敷地および周辺との関係が表現されていない点が物足りないとの評価であった。甲乙つけがたいところではあったが、完成度や提案性を重視しNo.4を入選とした。

なお、今回より募集要項が改正され、1学科あたり2作品まで応募可能となったこともあり、応募総数は「短大・高専・専修学校の部」11作品、「工業高校の部」9作品で、昨年度の5作品、2作品から持ち直した感がある。ただし、本コンクールをより意義深いものとするために、ひいては、本コンクールの目的である「学生、生徒の設計技能向上」のためにも、引き続き応募作品増加のための努力が求められよう。入選作品の講評は各選評に譲る。

（飯田）

## 住み継ぐ

能勢 知理君 (大阪工業技術専門学校)

曾祖父の時代から受け継がれてきた自分の生家をモデルとした、民家の継続的な改修の計画である。地域風土に根ざした民家を数世代にわたって住み継いでいくということは、日本らしい農村風景を継承していく上でも大きな課題といえる。生家の歴史から構造までを調査分析の上、将来の住まい方の提案をA3図面、29枚というボリュームに丁寧にまとめた力作であり、奇抜なアイデアやデザインはないものの、非常に真面目に取り組んでいることが評価された。

手に余す規模の民家を分割したり接続したりしながら各世代の独立性を保ち、適度な関係の同居が可能になるように、時間軸に合わせての空間構成の検討がなされている。敷地や建物規模にゆとりのある地方の民家ならではの提案であり、空間構成ばかりでなく世代間の接し方の提案とも言える。民家の持つ空間の豊かさを生かし、長く愛着を育む改修となれば成功といえるだろう。惜しむらくは、図面表現において、周辺環境との関わり方や、新しい切り口での住まい方のイメージなどが具体的に表現されれば、なお良かったと思う。

(西濱)

## 「続・丹下建築」 今治市役所再生計画

阿部 亮介君 (京都建築大学校)

愛媛県今治市の市役所建物を改修する計画である。元の建物は今治を故郷とする建築家・丹下健三の手により設計され、市庁舎、公会堂、市民会館の3つが外部空間を取り囲むように建っている。計画案は既存の3つの建物を改修し、ホール、ミュージアム、コミュニティスペース、店舗、広域避難場所からなる複合施設として大規模に増築を提案している。

タイトルの『続・丹下建築』が示す通り、丹下健三へのオマージュとなっている。丹下健三による既存の3つのボリュームを新しくつくる高層棟が結びつける。新しい高層棟は、6つのコアによるメガストラクチャーで構成されており、既存の3つのボリュームと高層棟とのバランスがよく練られている。今ある建物や3棟の配置を尊重しつつ、丹下健三の建築観を大胆に解釈した新しい建築が計画されている。

今の時代、この場所に高層建築が必要とされるのか、という疑問は呈されたが、学生らしいインパクトのある作品である。近代建築を保存しつつ、単なる保存に留まらない提案を含んだ計画である点を評価したい。

(小池)

## デ木ボ木 一六甲山の地場産材を利用したセルフビルドハウス

安福 和弘君 (明石工業高等専門学校)

六甲山の縦走ルート上に、地元の間伐材を利用してセルフビルドで建てる休憩所等を提案する計画である。人が手を入れることで山を活性化するという、伝統的でサステイナブルな視点を、格子パネルによる構造とそこに充填される葉の袋詰め断熱材という、現代的かつユニークな手法によって展開している。桧や杉などの間伐材でつくられるパネルを一定のモジュールに落とし込み、ボックス状に組み合わせて壁や屋根面を構成する。できたボックスの中に落ち葉やチップをつめた袋を充填することで冬の断熱性能を獲得し、夏には袋を取り去ることで自然通風を確保するというアイデアである。1/10のモデルを用いて実際に内部の温熱状況を実測し、その効果を確認していることも、このプロジェクトにリアリティを持たせ、ユニークな「アイデア」を「建築」という領域につなぎとめることに寄与している。伝統とのつながりを持ったテーマ設定とそれに呼応する現代的な生産システムの提案、そこから生み出される空間の質とそれを支えるディテール、そして立ち上がった空間イメージを表現し伝えるプレゼンテーションの美しさなど、あらゆる面でバランスのとれた非常に優れた作品である。

(角田)

## connection

山本 沙也加君 (大阪市立工芸高等学校)

この作品で提案されている小学校は、教室をはじめとする諸室をさまざまな形態のパヴィリオンとして計画し、これらを起伏の与えられた敷地全体に離散的に配置することで、われわれが見慣れきった住宅地に新しい風景を生み出すことに成功している。周辺環境にも配慮した、自然の緑と陽光にあふれた公園のような心地よさや、自由に遊び場を駆けまわる児童たちの賑やかさが、図面全体にわたって活き活きときめ細かく表現されており、提案内容と表現技法との一貫性についても評価できる。また、作者の意図は必ずしも明示されてはいないものの、人工の丘や池を配したランドスケープ計画は、計画地である大阪府堺市に点在する古墳群を想起させる。作品にあふれる生命力は、こうしたプリミティブな原風景のもつ素朴な喜びや驚きの感覚が、小学校という主題に楽しく響き合うことでもたらされているようにも思われる。

ただ、各パヴィリオンの自由な形態や、学年ごとの教室配置の根拠についての説得力にやや乏しく、また、図面表現に比べて模型（写真）の完成度が必ずしも十分でなかったことが惜しまれる。

(朽木)

## PAPPA-RAPPA ～一等地のアジュール～

岡田 真弥君 (大阪市立工芸高等学校)

この作品は現在大規模な再開発が進む大阪駅・北ヤードの一角に設けられた仮設的なイベントホールである。タイトルのPAPPA-RAPPAには巨大な施設が建設される前の更地の状態の中に見出された「原っぱ」の自由さと、その自由さを何事にも制約を受けることなく謳歌できるという意味での「パッパパー」な状態という、二重の意味が込められている。心に残るタイトルがつけられるのは、この案のコンセプトの強靱さを表している。近年大規模開発が続々と完成し大阪駅周辺も先進的な商業施設群がオープンして大変な賑わいを見せているが、いずれもが消費者の心理や動向を巧妙に捉えて用意された空間であり、人々の快適なショッピング体験の奥に重厚な管理システムが見え隠れする。作者が求めた「アジュール(管理の届かない聖域)」は私達が現代都市の中に常日頃感じるこうした窮屈さからの解放の場であり、「一等地」と「原っぱ」という価値の転倒を都心の一角に持ち込むという意味で、周辺環境へのストレートな応答ともいえる。そのエネルギーを具現化するようにテントやトレーラーを用いた舞台装置のシステムなど果敢な提案が示されている。

(槻橋)

## 「Ring Kindergarten」

上田 恭平君 (神戸市立科学技術高等学校)

バーチャルな遊びに囲まれた子どもたちに、体を使って自然の緑・土をリアルに感じ、五感を刺激する遊び空間のある幼稚園を提案している。RING 状に教室を配置し、その内側に遊戯空間を設け、内側に閉じた平面計画となっており、森に呼応した分棟配置になっている点も好ましい。教室は平屋建てで構成されているが、職員室は二階建てにし、RING の一角にタワーを設けることで、変化のある立面構成となっている。また、周辺の緑地とつながる様に屋上緑化を行い、コンセプトを素直にイメージし、膨らませていったスタディの様子がしのばれる夢のある外観になっている。ただ、自然を体感するための幼稚園で、外部の緑地との一体感のある外観ではあるものの、内部にのみ大きく開く計画を提案するならば、あえてそうするだけの魅力的なランドスケープデザインも必要であろう。樹木をランダムに配置するだけでなく、木々と建物の関わり方も検討し、ランドスケープと建築物が一体となった魅力的な内外空間を構築することを今後期待したい。

(佐野)